



# 現代教育

1991年7月1日  
(通巻)第60号

## いまなぜ石泉教育学か

信楽峻 磨

私は広島の地に出生したということもあり、また近くに真宗の篤学の方が住まっていたということもあって、中学校(旧制)時代から真宗学にふれるという学縁に恵まれた。しかし真宗学を本格的に学ぶようになったのは、戦後、京都の龍谷大学に入学してからのことである。この龍谷大学で真宗学を学ぶ途上、私は時おり京都の真宗学と広島の実宗学の相違を意識することがあった。かつて私が学んだ広島の実宗学における念仏理解、信心理解は、京都のそれとは一味違うものであった。

近世末期の頃に作成された広島、安芸の国の文化、政治、経済など全般にわたる調査記録に、『芸藩通誌』と

いうものがある。それによると、広島の実宗風俗について、

「親鸞宗を信ずるもの・・・その深く信ずるものは、家に神棚を置かず、病で祈祷せず」

「親鸞宗を信ずるものは、多く火化を用い、その残骨を収るのみにて、或は墓碕を建てず、位牌をも設けざるものあり」

などと記録している。真宗信者は、家には神棚を置くことなく、また墓碑も建てず、位牌も設けなかったというのである。広島地方において、真宗信心が如何に純粹に深く浸透していたかがうかがわれるところである。たしかに私の子供の頃には、神棚を祀る家は少なく、墓碑も極めて簡単なものであった。また私の田舎では地藏像などは見ることもなかった。それが太平洋戦争の進行の中で、家々に神棚を祀ることが勧められ、立派な軍人墓が建立されるようになってきた。そして戦後には都会の文化も流入するようになり、伝統の実宗風俗も次第に崩れていった。しかしそれでもなお、真宗信心の伝統は色濃く残っているようである。

このような広島地方における真宗風俗の伝統は、他の地方とはいささか相違するところであるが、そのことに

ついでには深い理由、根拠があつた。そのひとつに芸轍と称される独自の真宗教学理解の歴史がある。それは慧雲（一七三〇—一七八二）に創まる真宗学研鑽の学轍である。慧雲は自ら住持した報専坊に学寮を設けて甘露社と称し、多くの学徒を育成した。その門下の双壁に大瀧（一七五九—一八〇四）と僧叡（一七六二—一八二六）がいたことは有名である。慧雲はまた広く安芸の国内を巡回して信徒を教化し、各地区ごとに寄講（よりこう）を設けて毎月聞法会を催すことを創始せしめ、ことには家に神棚を祀り、位牌や護符を置くことを厳しく制誡した。その門人らも、その化風を扶助した。よつて世人は神棚下しの報専坊とまで呼ぶようになったが、またそのことよつて各地で騒擾が起きることとなり、時の権力により弾圧されるということもあつた。また暴徒によつて自坊が放火され焼失するということもあつた。しかしながら、この慧雲の教化の影響は多大であり、先に記した『芸藩通誌』に見られる如き、かつての広島地方における真宗風俗と、今日におよぶ安芸門徒の信心の深さは、ひとえにこの慧雲とその門下の力によるものといわねばならないようである。

この慧雲の門下であつた大瀧については、三業惑乱に

際して、身を挺して智洞と対決し、三業帰命説を排して、その後の西本願寺教団における安心理解の基礎を確立したことは、教団史上周知のことであるが、彼は早世した。それに対して僧叡は、教団史上に華やかに登場することはなかつたが、そのかわり広島地方にあつて、慧雲のあとを承けてよく真宗学を研鑽し、また信徒の教化に専念した。僧叡の教学理解とその流れは、その号に由来して石泉学派と称されているが、いまはその教学について若干の紹介を試み、この石泉学派の今日的な意義について考えてみることにする。

石泉教学の特色は、真宗教義理解の全般的におよぶところであるが、いまその主なるものを挙げれば、如来論、教法論、仏性論（人間論）、行信論、助正論、真仮論、俗諦論などがある。

その如来論についていえば、僧叡は阿弥陀仏と領解するに、その『無量寿経』に説く法蔵説話を忠実にふまえて、それは従因至果なる十劫成仏の仏であるといふのである。もとよりその十劫成仏の説話に基づきながらも阿弥陀仏の永遠性を主張するわけであるが、基本的には、阿弥陀仏と諸仏との間には共通性を認めるのである。それに対して、今日の本願寺の伝統的教団教学の主流をな

している空華学派においては、阿弥陀仏とは真如そのものであつて、従果降因、無始無終の久遠仏であるというのである。したがつてここでは、諸仏に対しては阿弥陀仏の唯一絶対性を主張するのみである。このことは、かつての近世における宗派イデオロギーが強力に反映した、教団教学の中で生まれた発想であろうが、今後の教学においてもそれを単純に主張しつづけるであろうか。

そのことは次の教法論に直接に関わる問題でもある。僧叡における教法理解は、上の如来論に見られる立場からして、阿弥陀仏の絶対性を主張しながらも諸仏の立場を肯定する視座をもつところ、諸仏の教法も一応は肯定するわけである。その点、日本および世界の諸仏教、諸教団との対話は充分に成立するところである。ところが空華学派は、その如来論において、阿弥陀仏を唯一絶対視し、諸仏もすべて弥陀仏の願力によらざるかぎり成仏は不可能であると主張するわけである。その点、この空華学派では、ひとり阿弥陀仏の本願の仏道のみが成仏道にして、その他の聖道教が説く仏道は、すべて成仏の道ではないというのである。事実私の学生時代、ある真宗学者が龍谷大学の講義で、とくとくと聖道無得道説を語られるのを聞いて、大きな疑問を抱いていたことがある。

こんな発想、こんな教学が、今後もお社会に通用するものであろうか。

その仏性論（人間論）については、僧叡は極めて明快に本具の仏性を認め、人間はひとしく仏性を宿し、共通して心性もと清浄なる存在であるというのである。この発想は、大乘仏教の根本的立場である「一切衆生悉有仏性」の原理に順ずるものであるが、そのほとんどが、本具仏性否定説をとる真宗教学の中にあつては、まことに特異な理解である。しかしまた、このような解釈は、今日における人間差別の問題、ないしは生命倫理の問題にも深くかかわる思想として充分に注目されるべき点である。僧叡は何故に、あえてこのように本具仏性を肯定し、人間さらには一切の衆生が平等に仏性を宿し、心性清浄であることを主張したのか、現代の真宗教学においては改めて問いなおされるべき重大な問題であろう。その行信論については、僧叡は、行を明確に称名念仏と規定する立場にたつわけである。このことは、今日の伝統教学の主流をなす空華学派の理解が、基本的には、行を名号と見るに對して明らかに對立するところである。伝統的には行を人間の行為とすることを排し、すべて如来の行として理解するに對して、僧叡はそれを衆生の行、私

自身の行為として捉えるのである。そしてまたその信については、僧叡は心澄淨、すなわち心が澄んでくることだと理解する。それは仏教における信の第一義的理解をまさしく踏襲するものであり、またそういう理解は、今日の研究によれば、サンスクリット本『大経』の本願文の信樂、本願成就文の信心歡喜に相応するサンスクリット語チツタプラーダーの原義をもうけるものである。その点、僧叡における信とは、主体的な宗教的知見、目覚めの体験の開発を意味するわけである。そのことは伝統の教団教学において、信を理解するのに、おしなべて対象的な信と捉え、如来の名号をわが心中に領納、領受し、またその名号を当て頼りとし、それに信順、随順することであると解し、さらにはその名号が私の心中に印現されることだとも語るのに比較すると、明確に相違するところである。そしてその行信の関係については、伝統教学が基本的には能所二元論的に捉えて、行を信の対象とする所信、信を能信とすると解釈するに對して、僧叡は両者の相即不離を語るわけである。すなわち行信の関係は、法相の表裡を明すものであって、法義の相状からすれば、行（称名）は表であり、信（信心）は裡であって、両者は表裡の関係にあり、本質的には即一すると

いうのである。その点、僧叡における行信理解は極めて特色あるものであり、ことにその信心を念仏に即する心澄淨として、まったく主体的な知見（めざめ）の開発のことであると領解した点は、信心とは私における新たな人格主体の確立を意味することとなり、伝統教学における信理解が、おしなべて対象的な信としての二元的な領納や随順を語って、つねに体制権力に對する追隨、從属を教えてきたのに比較すると、明確に相違するところである。そのことは、これからの在るべき真宗教学を構築するに際しては、充分に注目され、評価されるべき重要な視点であるといえるように思うことである。

そしてまたその助正論については、僧叡は特異な弘願助正義を主張して、五正行を中心とする、念仏者の積極的な社会的実践論を展開するのである。僧叡によれば、真宗者の具体的実践の基本は称名念仏にあるが、その称名正業に對して、それに随伴し、それを扶助するところの助業も重要であり、その助業については、五正行中の前三後一なる読誦、觀察、礼拝、讚嘆供養の同類の助業のみならず、異類の助業としての、それ以外の諸種の行業実践をもすべて含むというのである。すなわち僧叡は、真宗者の実践論として、称名念仏に統攝されるさまざま

な行業の実践を積極的に評価し、その実践を強力に勧励するのである。その点、その他の学派、ことには伝統教の主流をなす空華学派が、この弘願助正義を排斥して、真宗者の実践については、たんに信心、名号の相発としての五念門行を明かし、名号の功德が自然に三業に現われて、礼拝、讚嘆、作願、觀察、回向の五種の行為になるとのみ語るのに比較すると、明確な相違が見られるところである。かつての伝統真宗教学が、真宗者の実践について明かす時、自らの信心の内実から導き出される何らの積極的な論理ももたずして、つねに真俗二諦論的、時の体制権力の論理を借用しながら、それに従属する真宗者の生き方を明かしてきた最大の理由が、真宗における実践論が、抽象的、観念的な枠組みの中での発想に止まっていたからによることを思う時、またこの僧叡の積極的な実践論については、改めて再評価されるべき点があるのではなからうか。

そして次の真仮論については、親鸞がその『教行証文類』の中の「化身土文類」において、『無量寿経』の教法を真実とし、その他の浄土経典および一切の仏教経典の教法を権仮と捉えて、それらの権仮の教法は、ついには真実に誘引するための方便の教法であると主張し、ま

たこの仏教以外の教法、ここではことに伝統的な習俗としての神祇などの外教を挙げ、それを邪偽として批判していることについての理解の問題である。その神祇などの外教を邪偽と判定する文については、僧叡は明快にその意趣を受けて、

「真宗の人此を犯せば、既に仏法に非ず、往生浄土などということ勿論いわれぬことなり。また此がいよいよ邪偽の非法なればこそ、仏愍に誠め給うなり。此の非法を少しでも心に執じ挟んでおるといふと、正見には入り込まれぬなり」(随聞記第六十三卷)

と語っている。ところが、伝統教学の主流をなす空華学派の立場では、

「たとえ外教に明かすところと雖も、勸善懲悪は我が仏教を翼賛するものなり。故に外教の所明と雖も、一概に偽とはいふべからず」(敬信記第六十九卷)

と主張するのである。このような外教肯定の発想は、今日の空華学派の真宗学者も同様に語るところであつて、神道といい、習俗というも、基本的には仏教に入らしめるための方便であるというのである。今日の西本願寺教団における習俗肯定論の主張も、本質的にはこの潮流に基づくものようである。しかしながら、このような方

便の理解、眞仮論が永く眞宗信心の内面に神仏混合の思想を育て、またかつての戦時下において、西本願寺勸学寮が神宮大麻の奉祀を肯定し、その戦時下の教学において、仏神一如を明かして、念仏の道は惟神（かんながら）の道であるといひ、靖国と浄土とはひとつであつて、靖国に生まれるものは浄土に生まれると語らしめたのではなかつたのか。親鸞における眞仮偽判の根本意趣はどこにあつたのか。かつて安芸の慧雲が、神棚を排除し、位牌や護符を否定したのはいかなる論理に基づいてのことであつたのか。いまの僧叡の理解も、この慧雲の思想を継承することは明白である。このような僧叡の見解は、今日依然として根強い靖国神社を中核とした神道国教化運動に対して、これからの眞宗教学を構築するについて充分に注目すべきところである。

そしてまた俗諦論については、多くの問題があるが、その中でもことには親鸞が「化身土文類」において、『菩薩戒經』（梵網經）を引用して、「国王に向かつて礼拝せず」と明かす文について見ると、僧叡は、

「此れらは世間へとつて不都合なことのようだが、凡そ出家たる自分、仏弟子たる者、三世諸仏解脱相の服たる袈裟かける者は、俗に向つて礼拝することは無き

ことなり」（隨聞記第六十三卷）

と明かして、仏弟子たるものは、いかなる權威であろうとも、それが世俗の価値であるかぎり、決して礼拝すべきではないのである。それに対して、伝統教学、その主流である空華学派の立場は、

「此の文を心得そこなうときは、ただ身を高ぶるの道具となりて甚だ仏意に背く、（中略）国王等を礼せざるときは、則ちお咎には預らざれども、心得ちがうて身を高ぶるときは、御上よりお咎めにあう。心得べきことなり」（敬信記第六十九卷）

というのである。ここにも明確に両者の相違が見られる。かつての戦時教学において、天皇と阿弥陀仏は同一であり、天皇の命令に叛くものは浄土に往生はできぬといひ、天皇の写真に向つて念仏を称えよといったのは、この親鸞の国王不礼の教訓が正しく領解されていなかったからであり、またこういう御上のお咎めがあるから気をつけよという如き解釈から、必然的に戦時教学が生みだされたのではなかつたのか。この国王不礼の文をめぐる近世の眞宗学者の解釈は、西本願寺派、大谷派をふくめて、すべてこの『敬信記』の発想に似るものであり、明確に不礼を主張するものは、ひとりこの僧叡のみのものであ

る。ここにもまた僧叡の俗に対する、明確な信心の姿勢を見ることのできるわけである。現代における真宗教学においても、この僧叡の俗に対する姿勢は充分に学ぶべきことであろう。

以上、僧叡の真宗教学理解について、いささか瞥見したが、その論理の展開はまことに精緻であり、また事の本質に対する慧眼はまことに鋭い。上にも少々紹介した如く、それは真宗教義の全般にわたって新しい視座をひらくものであって、その至るところに新解釈が試みられている。私は何もその教学理解について、全面的に賛意を覚えるものではなく、批判されるべき点もあることを承知しているが、ともあれそれは、親鸞の根本意趣をよく開顯する点が多々あるように思うことである。しかしながら、この僧叡の教学は、きわめて能動的、実践的な性格が強いところから、三業惑乱以後の西本願寺の教団教学においては、異端視され、排除されることとなった。この惑乱以来、教団教学は、もっぱら抽象的、観念的な性格の強い、体制順応の受け身の教学となり、能動的な教義解釈、能行系に属する教学は、すべて異端視するごととなり、その傾向は現代にまでおよんでいるわけである。その点、僧叡はこれほどの学才を宿し、教学的功績

も挙げながら、教団からは終生にわたって異端視され、まったく黙殺されてきた。しかし明治四十四年、親鸞聖人六百五十回遠忌法要に際し、広島の学僧たちの陳情によつて勸学職を追贈され、またその頃になって、ようやく龍谷大学の図書館に、僧叡の全著述が収蔵されることとなったという。没後百年近くたってからのことである。

今日の西本願寺教団における真宗教学は、性格的に大別すると、この僧叡の石泉学派といまひとつの空華学派の二学説に分けられ、それぞれが特色ある教学として理解されているが、実際の教団教学としては、その空華学派が主流をなし、いまでもこの石泉学派の学説を唱えることと異端視される傾向がある。これが今日の教団教学の实情である。しかしながら、かつての伝統教学が、神祇崇拜と妥協し、天皇權威にからめとられて、真俗二諦の論理を主張し、ついには戦時教学なるものまでも生みだしたことを、厳しく自己批判し、そしてまたこれからの新しい二十一世紀の時代に向けて、人間のまことの生きざまを教示する現代の真宗教学を構築するためには、そして親鸞のまことの根本意趣を充分に開顯するためには、この僧叡の石泉教学はきわめて重要な意義をもっているのではないか、私があえて、いまなぜ石泉教学か、とい

うテーマで一文を草した理由である。



## 迷いながら

元山郁子

今年から、ある中学校の二年生を担任することになった。昨年から、この中学校で英語を教え、副担としてかわってきた。八年前ぐらいは、校内暴力の風がふきあっていたらしく、ここ一、二年でやっと学習のできる環境になってきたらしい。

最初、廊下にはりめぐらされたカンバンの多さとマニュアル化された時間の使いかたに驚いたものだ。「ここまで徹底しているの。」

環境整備という分掌につき、掃除の仕方の細かさ指導、壊れたところを一日もそのままにしておかない、トイレ

の掃除に使う洗剤には、日付を書き、細かく使い方を指導していく。「環境は人をつくる」。それが環境整備部のこの中学のスローガンになっている。

地域の環境は、住宅都市として発展し、駅のそばには大手デパートがあり、最初、「なんてきれいな街なんだろう」という印象を受けた。しかし実際は、その大手デパートを利用するのも、校区外の人が自家用車の外車で来るニュータウンにいる人々で、私が勤める校区の人々はあまり利用しない。

それだけ家庭の生活は裕福ではない。信じられないことだが、昼のお弁当さえ買うことのできない子がいるのだ。

そういう事情もあり、家庭の中の教育力がなかったためか、自分の将来設計が出来ず、また先が見えあきらめてしまうのか中三の夏以降に荒れてしまう子が多い。

私が担任しているクラスも、家庭訪問してわかるのだが、各家庭、本当に精一杯生活している様子がうかがえる。そういう様子を見ると、教材一冊買うのも、はたと考えてしまう。

傲慢かもしれないが、今彼ら自身が生きている世界から出させてあげたい。



壕で自決した日で、近代史上稀にみる凄惨な沖縄戦が終わった日とされています。この摩文仁丘で県主催の追悼式が行われたようですが、八九年の三月に私も家族と共にこの地をおとずれました。その一角に「平和祈念資料館」があり、沖縄戦の全容を知る唯一の資料館といわれ、アメリカ軍の砲弾や集団自決の写真やその時使われた鎌や斧などの遺品が展示されています。戦争の非惨さがひしひしと伝わってき、途中からは胸が苦しくなるほどでした。・住民の証言がパネルやファイイルで展示されている部屋で、当時幼稚園だった長男が「お父さん、何て書いてあるの、読んで」というので、読んでみると、ガマ（壕）での飢えと渇きの苦しさのなかで「小便を飲んだ」という証言がいくつかでてきました。長男は相当ショックだったようで、資料館を出てから私の手をぎゅっと握りながら「お父さん、戦争って、オシッコのまなあかんねんな」と真剣な顔で言うのです。テレビやマンガで見る戦争は、ミサイルや機関銃の撃ち合いであったり、首や腕がふつとび全身血まみれとなるのが戦争だと何となく思っていたのに、ふだん飲むジュースやお茶や水が飲めなくなり、自分がするオシッコを飲まなければならなくなるのが戦争だと衝撃とともに実感したようでした。

テレビで写真で戦争の惨たらしさを知識や感情で理解してきた私にとって、自分の生理のレベルで戦争をとらえた子どもの感覚に、大切な視点を教えられたようです。親鸞が晩年になってもなお自己の肉体を凝視しつづけ、罪業の深さを悲歎してやまなかったのは、仏に成るといふことが、生理や肉体のレベルから、さらにもっと根源的な生命活動の原初の段階から成仏を問題にしたからでありましょう。いま、飲み・食べ・排泄する身体（からだ）にこだわったところから親鸞の教えをふたたび聞く必要があります。

（福）

本誌年間講読料（季刊） 一五〇〇円

編集者 福本憲 応

発行者 大江 修

発行所 現代真宗教学研究

〒五七七 東大阪市森河内西二丁目三二二八

TEL 〇六（七八三）一九一四

郵便振替番号 京都〇一〇一八七七